

GS01-7 消化管 GVHD 治療薬としての経口ベクロメタゾン製剤

○三谷 健人¹, 岸上 さやか¹, 後藤 梓沙¹, 林 寛子², 兼村 信宏³, 曾田 翠¹, 鈴木 昭夫², 笠原 千嗣³, 鶴見 寿³, 伊藤 善規², 北市 清幸¹

¹岐阜薬大, ²岐阜大病院薬, ³岐阜大病院医

【目的】造血幹細胞移植後に頻発する消化管における移植片対宿主病 (GI GVHD) の治療には高用量の経口ステロイド剤が用いられるが、全身性の副作用が問題となる。プロピオン酸ベクロメタゾン (BDP) は吸入剤として承認使用されているが、経口では消化管局所に作用するため、全身性の副作用を起すにくいことが期待される。そこで、我々は経口 BDP 製剤を作製し、GI GVHD に対する効果を検証した。

【方法】本研究は倫理委員会の承認を受けた臨床研究であり、H23.11-H26.3 に岐阜大学医学部附属病院で血液がんのため、造血幹細胞移植を受け、GI GVHD を発症した患者 (N=17) を対象とした。患者には、経口 BDP 製剤(胃溶または腸溶カプセル)を 1 日 4 回投与し、その効果を投与開始から 14 日間後方視的に評価した。【結果】経口 BDP 製剤の使用は、GI GVHD による食事量の低下を経時的に有意に回復させると共に、TPN の施行数を有意に減少させた。一方で、経口 BDP 製剤使用による全身性の副作用と疑われる症状は観察されなかった。また、標準治療と比した場合、感染症発症率と感染による死亡率の減少、生存期間の延長も見られており、引き続き経過を観察している。【結論】以上の結果より、既承認薬 BDP の経口製剤は、全身性の副作用が少ない、造血幹細胞移植後の GI GVHD の新規治療薬として有望であることが示唆された。